
地獄見物列車

三代渡吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄見物列車

【Nコード】

N6944E

【作者名】

三代渡吉

【あらすじ】

あの世とはどういうところなのであろうか？閻魔大王は、人間のために地獄見物列車を設立した。

仲間に背中をさすってもらっていた男が、腹の中のものを呻き声と一緒に吐き出した。

土曜日の深夜。夜も深まった繁華街は、いよいよ馬鹿騒ぎで弱った人間が闊歩する時間となっている。

通っていく人々は、断末魔を聞いて野次馬へと変身するも、実態を見るとすぐに繁華街の一部へと戻っていった。

「うわっ、皆摩^{かいま}先輩大丈夫ですか？」

「だいじょーぶだよ。お前心配しすぎだつてんで。うええ〜」

皆摩は、強がりながら性懲りもなく胃の中身を吐き散らした。

後輩達は、皆摩自身には見えないよう、怪訝そうな顔を浮かべる。「くそつ。せつかく高い金払って食ったものがよお……うぶっ」

さつきからずっと、皆摩はこの調子であった。

酒に強くないのにもかかわらず、アルコールの強い酒を散々注文した彼は、神経が麻痺してしまったのか、普段食べないような量を食い込んだ。

結果、酔いが冷めて身体が正常に作動し始めると、当然身体は胃が無理をしていることを察知する。

そして、胃に入らないものを外に吐き出せ、ついでにパンパンになっている原因のものも吐き出せ、と次々に命令していくのだ。

部下がうんざりして、飲み会そのものにトラウマを持ちそうになったくらいになって、ようやく嘔吐が収まった。

「じゃあ悪いけど吉沢^{よしざわ}、駅まで連れてってくれや。電車までいったら、後は大丈夫だから」

といって、皆摩は後輩の吉沢を生贄として選ぶと、肩を借りながらようやく家路への道へ進んでいく。

駅につくと、もう終電間際だった。

吉沢は、逆の電車で帰るからと、皆摩を置いて反対側のホームに行ってしまった。

ありがとうと皆摩は形だけの礼を言いながら、風呂にどっぷりと浸かるようにして、ベンチへ腰をかけた。

吐き気はないが、まだ意識は朦朧としている。

今、反対のホームに着いたのは吉沢だろうか？ それとも別だろうか？

焦点の合わない皆摩の目では、それすら判断することが出来なかった。

「おおつ、電車がきやがった」

錆びた鉄を鈍った刃で削ったような、鈍く嫌な音がホームに響いた。思わず皆摩も耳を塞ぐ。

見ると、ホームにやってきたのは、時代に取り残されたような、えらく年季の入った電車であつた。

「路面電車みてえだな。このご時世にもこんなモンが走ってるのか」ほろ酔いからくる機嫌の良さもあつてか、ウキウキとした様子で皆摩はやってきた電車に乗り込んだ。

皆摩以外に乗るものはいなかった。

それをいいことに、彼は寝転ぶようにして席を占有した。どうせこの時間では、それほど人は乗ってこないだろうと踏んでのことだ。

「おおつ、吉沢。なんて顔してんだ」

窓の外を眺めてみると、隣のホームで電車を待っている吉沢の顔が薄っすらと見ることができた。

ぼやけているせいかな、やたら彼の顔が間抜けに見えて、皆摩は寝転びながらクスクスと笑った。

「なんだよ。アイツも結構飲んだのか。人の世話焼ける立場じゃねー奴を連れてきちゃったな」

皆摩がクスクス笑っているうちに、電車の扉は閉じた。

物凄くグラつきながらも、皆摩一人を乗せた電車は駅を出た。ゆっくりと、しっかりと。

しばらくして、皆摩は大きなあくびをして目を開けた。

彼はこの古ぼけた電車の懐かしさからか、飲みの疲れか、ずっと眠っていたようだった。

目をこすりながら、彼は身体を起こそうとする。だが、疲れていてすぐには立てなかった。

「ちよつと、ダンナ！　ここは七人がけ、アンタの家のソファーじゃないんだよ」

「ああ、ごめんなさい」

皆摩はすぐに立ち上がり、一番端の席へいそいそと移動した。

こんな深夜には需要がまったくといっていいほど、夜の客足が少ない電車に、文句言われるほどの客が乗ったのかと、皆摩は少し驚いていた。

また大きなあくびをして、彼は隣に座ってきた人間の顔を見てみた。

隣の人間の顔は、腐っていた。

「ひゃあああ！」

裏返った声で絶叫する皆摩に対して、周りの乗客が一斉に彼の方へと向いた。

彼を見ている乗客は、みんなおかしかった。

頭だけガイコツな者から、全身がガイコツな者が、あちらこちらにいた。

さらに、全身腐っている者もいれば、所々腐っていて、一部はまっとうに残っている者もまでいる。

左の顔は美人そうな顔をして、髪もきれいなのに、右の顔は目玉はなく、皮膚は腐りきって髪が焼けたようになった女は、特に彼を大きく動揺させた。

「俺は、もしかしたら……とんでもないのに乗ってしまったのでは」皆摩は、バンバンと叩いて車掌を呼んだ。

出てきた車掌も顔が腐敗し、手足が骨だけ、でも乗務員の制服を

着ているという奇怪な格好だったが、そんなミスマッチは皆摩にとつてどうでもいいことだ。

「これは、地獄行きなのか？」

「そうだよ。え？ アンタ知らずに乗っちゃったのか？ あー、よく見たらアンタ、身体立派だしな」

「世間話なんてする気はねーよ！ 頼むから死ぬ前に降ろしてくれ！」

「ああ、じゃあ乗車券見せて」

そう催促されて、皆摩は慌てて買った乗車券を渡した。車掌はまた間抜けな声をあげた。

「アンタ、ラッキーじゃないか」

「ラッキーだと？ 地獄に行くのにか？」

「確かにこの列車は地獄行き。だけどね、その切符は十兆人に一人が当たるか当たらないかの瀬戸際にあるほどレアな、地獄見学スタンプつきの切符だよ」

「地獄見学スタンプ……付き？」

「よく見てみなよ。料金の下に小さくドクロマークがあるだろ？」

言われてみると、確かにドクロマークが記されていた。

「こいつはね、閻魔大王がもつと地獄について知ってもらうために始めた、地獄見学ツアーの招待券みたいなものでね。つまりアンタ、地獄を見るだけなら死なないんですわ」

「そ、そうなのか」

「安心してください。アンタが駅の改札を超えたり、列車の途中で地獄に飛び込まない限り、朝にはアンタ駅で寝転がっているとしますよ」

チーンッ……チーンッ。

路面電車の発射合図のような鈴が鳴った。

見ると、『等活地獄前』という駅名の書かれた看板が、ロウソクで怪しく照らされていた。

「せっかくですから、私が地獄の風景をご案内致します。なーに、どうせ車掌の仕事なんて、後方確認くらいしかありませんから」

カラッコロツと、小気味良い足音を立てながら、車掌は皆摩を窓へと案内した。

窓の外には相当に暗かった。

夜だつて、星がなくても空という存在は確認できるはずなのに、今はそれが感じられなかった。

しばらくすると、所々赤黒く光っている、広く荒れた世界が映し出され始めた。

「どう見ても、人間世界じゃない……」

「まあ、繁華街のネオンでは、このおどろおどろしい感じは出せませんでしょう。ハッハッハ、でも私はこの風景が大好きでしてねえ」

「今通つてるのはなんなんですか」

「焦熱地獄です。もう言葉では言えないくらいの熱いところで焼かれ続け、焦がされる、だけど死ねない……」

車掌は頂垂れると、急に手をバツと振り上げながら叫んだ。

「そういう、恐ろしい……！ 地獄なんです！」

息を荒げながら話す車掌の様子に、皆摩は、自分が今如何に恐ろしいところを通っているかを肌で感じ、冷や汗を流した。

「次の駅が“黒縄地獄”、そのまた次が叫喚地獄。昔は酷い順に階層式になってたんですが、最近は何分地獄も変わりました。あ、どういう地獄か説明しましょうか」

「いいえ、結構！ 痛い話は嫌だ、気持ち悪くなる」

「さようですか。ひとまず、あなたの大まかな暦を見る限り、これから大きな盗みや殺生を行わなければ、普通の軽い地獄にいけるでしょう」

「はあ、それでもやっぱり悪いことはしてるんだなあ」

「それはそうです。お寺のお坊さんだつて、芸達者人だつて、お上の方々だつて、悪いことしたことがない者なんて、いません。ただ、少なければ少ないほど、その懺悔は軽くなります」

「これから戻った後の人生次第、ということか」

と皆摩がつぶやくと、腐った顔が彼の前にいきなり現れた。

「お客さんはね、間抜け面してる。こんな面した人が、誰かを安易に殺したり、誰かのものを盗んだりしないでしょ」

「それは褒められてるのか……？」

「いやつはは。少なくとも、悪いことじゃないですって」

それから地獄の紹介をされながら、電車はどんどん終点を目指して走っていった。

鋭いシルエットの城が駅から見える“閻魔御前”の駅を過ぎた次こそが、彼が行くであろう、軽い罪を懺悔するための地獄だった。

駅についてみると、死んだ人がわんさかいて、電車から降りる死人も一番多いような気がしていた。

「これで地獄は全部周りました。次こそ終点にして、地獄の罪人達の憧れの場所。地獄街です」

地獄街というと、荒廃した街の名前にしか聞こえなかった。

しかし、当の車掌はこれから行くのがとても楽しみな様子で、窓をしきりにずっと覗いている。

「そんなに良いところなんですか？」

「そりゃあ、もう死んでるから死ぬことはないし。一生で自分が輝いていた頃の姿で生活出来るんですからねえ」

「あなたはあそこに住もうと思わないんですか？」

「いやだって、これが私の刑罰ですから」

窓を眺めながら語る車掌にどう返事しようか悩んでいると、車掌は嬉しそうに指を指し始めた。地獄街が見えてきたらしい。

皆摩も車掌の横に立って眺めてみると、キャンプファイヤーか祭りの提灯のような明かりが見えた。

そして、薄っすらとだが、温泉郷のようなどこか情緒のある町並みの形も確認出来る。

地獄なのに、地獄とは到底考えられない。そんな空間がそこには存在しているように見えた。

「終点の地獄街でございまーす！」

車掌がそう言うと、本当に少数の乗客が、そこから降りた。すると、ガイコツやゾンビだらけだったはずの乗客の身体が、駅に降りると同時に、元々そうだったであろう、人間の身体へと変化した。

来ている服装こそ、時代劇に出てくる町民のような格好だったが、顔立ちは皆現代人に近いようであった。

「あつ、侍だ」

一人だけ、ゆっくりゆっくりと踏みしめるようにして、駅に降り立った人間がいた。

ちよんまげを結ったその男は、自分の身体の変化に気づくと、今度は発狂したように喜んで、街へと消えていつてしまった。

「お客さん。駅のホームに出たらあなたも地獄行きですよ。私が屋根へ引つ張りますので、そこからご覧ください」

降りる乗客達に気を取られていた皆摩は、いつの間にか屋根に乗っかっていた車掌のそれに従って、電車の屋根に上った。

「これは千里せんり双眼鏡です。どうぞ御覧になって」

と、双眼鏡を渡された彼は、それを覗いて感嘆の声をあげた。

そこは、地獄の管轄故に極楽浄土のような青い空もないし、美しい花が咲いているわけでもなかった。

だが、そんなことが些細なことに感じられるほど、人々は楽しく暮らしていた。

どこまで続いているか、千里を見通すことが出来るというこの双眼鏡でも眺めることは敵わなかったが、とても長大な街であることだけはわかった。

もしかしたら、地球を一周できるほどの長さがあるのではないか、そんな夢想すら浮かぶほどだ。

「とまあ、こんなところですよ。楽しいのでしょうか？ 地獄の罰を終えたものだけが味わえる、最高の空間ですよ」

「ああ、素晴らしい。なんて素晴らしい！」

街の熱気を一身に浴びて、無関係者である皆摩もその熱気に感化されて、興奮しているようだった。

「どんな地獄の刑期を受けたとしても、やはり地獄における『死』はありません」

「……」

「本当の極悪人は、生者にとつての死の連鎖に耐えて、狂ったあげくに、この極楽へと足を踏み入れるのです。侍さんはそうだったのでしょうか」

「誠実に人生をまっとうしていれば、ああならなくて済むというわけですか」

「それは勿論です」

「俺は今まで、まったく悪いことをしてこなかったわけではない。でも、人を殺すとか、そんな外道に手を染めたことはない」

「偉いですね。私のように誤ってとはいえ、他社を殺め、百と数十年こういうことをさせられてる者より、美しいと思います」

「今俺が死んだら、早いうちにあそこにいけるんだな！」

「え？」

それが、皆摩の決意であつた。

皆摩は列車から飛び降りて、駅のホームに足をついたかと思うと、車掌の目の前から消滅した。

車掌は、帽子をとつて、もう頭髮の残っていない、腐った頭をポリポリかきながら、ため息をついた。

「あーあ……まさか自分から死ぬなんて。引き止めてあげればよかった」

その後、皆摩は五ヶ月も待たされたあげく、閻魔大王よつて“刑罰”を与えられた。

家族や会社を省みず、自ら死を選んだ罪は重かつたようで、周りの陪審員らしき地獄の者達の表情は冷たい。

皆摩は、こんなことになるとは思っていなかったのか、冷や汗を

流しながら、高層ビルのような大きさを誇る身体の閻魔王と対峙していた。

明らかに閻魔は怒っていた。そんな、自分から命を絶つことが、そんな重罪だったなんて。

「これより、この男に地獄の刑罰を与える」

気づいた時、皆摩は病院のベッドの上で眠っていた。

「先輩、大丈夫ですか？」

聞こえたのは、後輩である吉沢の声だった。

「パパ！」

「あなた！」

そして、家族の声だった。

「いきなり線路に飛び込むんだから、ビックリしましたよ。電車に撥ねられて重症だったんですよ？」

「ああ……」

全身包帯に巻かれていた皆摩は、周りを見渡して、呆然としていた。

夢を見ていた？ 酔っ払って電車に飛び込んでしまっ、いつの間にか奇怪な夢を見ていたのか。

皆摩は、意識が朦朧とする中で、世界が歪んだように見えているのがわかった。よほど酷く撥ねられたのだろう。

何度か瞬きさせて意識をハッキリとさせながら、皆摩は見舞いに来てくれた人達の顔を見た。

彼は、言葉を発することが出来なくなっていた。

見舞いにきていた三人は、吉沢がゾンビで、家族二人がガイコツだった。

「うわあああつ……」

あまりの激痛に悲鳴を発することも出来なくなっていた。

驚愕のあまり、ただでさえ怪我で歪んでいた顔をさらに歪ませていると、ガイコツの妻が言った。

「怪我が治ったら、また働いてもらいますからね」

退院した後、彼を迎えたのは、死臭のする会社の窓際席だった。

怪我をしている間に、皆摩の扱いは劣悪になっていた。

前々から評判が良くなかったということも起因しているのだろう。文句も叫ぶことが出来ないまま、皆摩はしょんぼりしながらその席に座った。

黙々と仕事をこなしながら、仕切りにこちらを眺めてきたり、自分を奴隷のように踏んづける亡者達を見て、皆摩はしみじみとつぶやいた。

「そうか、最大の地獄はこの世だったんだ。しかし、俺は本当の現世に戻ることもなく、年を取ることも死ぬこともなく、ただここで働かされ続けるんだ……」

涙がポロポロと溢れてきた。あの顔も性格も美しいと思って結婚した妻の顔も、可愛らしい一人息子の顔も、今は拝むことが出来ない。

「どうしてもっと、現世を楽しもうって、浮かばなかったんだ……俺はバカだ」

シクシクとすすり泣く彼の元に、ガイコツがまた書類をドサツと置いた。

今日も彼は、明日の朝まで残業だ。

明後日も、明々後日も残業だ。

（後書き）

怖いものとは何か？ を追求するためにホラーにしようと思ったのですが、結局はファンタジーになったのでジャンルをホラーにしません。オチは当初の読めやすいオチから変えて、逆にタイトルと焦点がズレてしまった気がします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6944e/>

地獄見物列車

2010年10月8日15時34分発行